



昨年来、自称「タリフマン」が世界に大混乱を起こしています。司法当局から「違法」と指摘されて手法を変更したようですが、また関税の返還手続きが開始されたとのニュースもありましたが、混乱が収まってもその間の損失は取り戻せません。さらに大きな影響があることも着手してしまいました。こちらも世界各地から「国際法違反」だ、「はだかの王様」とか「朝令暮改」等々、様々な形容や批判が出ています。夕食会で発砲事件もありました。一刻も早く民主国家としての調整機能が働くことを期待したいものです。一挙一動毎に、為替、株価や原油価格が乱高下しますが、この間にインサイダー取引どころではない、巨額の蓄積をしたグループ（ファミリー？）もあるものと思われれます。入国者の ESTA 申請に SNS 情報提供義務化とも言われるあの国、このくらいのことで書いたら入国が難しくなるのでしょうか。

今回は「タリフ」の語源となったとの説もあるスペインのタリファからフェリーで渡って、1 日観光をしたモロッコタンジェの写真を拾ってみました。イベリア半島最南端のタリファが、ドックを使用する商人に課金した最初の港だったことから、タリフ（関税）の発祥地といわれるそうです。モロッコと最小幅 10 数 km のジブラルタル海峡を挟んでいます。津軽海峡よりも狭く、今注目を集めている中東の海峡が最小幅 33km とのことですからその半分以下しかありません。高台からであれば、海峡を通過する全ての船舶を監視できることにはなりますが、密輸や不法移民が絶えない場所のようです。

タリファから 20km 程北東のアルヘシラスのホテルで前夜にツアー（フェリー定価運賃往復と比較しても割安な 1 人 6,000 ペセタ（1 ペセタ＝約 1.2 円）程だったと記憶）を申込、朝 8 時過ぎに迎えの大型観光バスで 40 分程移動（乗客 2 名）、タリファ港でツアー客が集合、フェリーで 30 数 km・1 時間程でタンジェに着きました。フェリーを降りた港からモロッコ人のガイドが付き、数時間の昼食付タンジェツアーを楽しみました。ガイドはドイツ語と英語で説明してくれました。それまでが妻と 2 人のスペイン個人旅行でしたので、自分達の行きたいところに行き、滞在時間も調整が利きましたが、団体に連れ回されるとそうもいかず、また狭い迷路のような路地が多いカスバ（城塞）とその中の旧市街地が主な立寄り先でしたので、あまり思ったような写真も撮れていません。それでも直前に思い立ったので下調べしていなかったモロッコで、スペインとは違った文化の臭いや街並みを、気楽に体感することができました。写真はフィルムカメラの時代で、もっと撮った記憶がありますが、ネガは見付けられずアルバムに貼ったプリント画像からスキャンしたもので、枚数も少なく画質も良くありません。

冒頭の写真はタンジェ郊外で、手前の方は比較的高級な住宅地で奥の丘の向こうがカスバです。右は城壁の門です。先頭のガイドの黒い服がモロッコの民族衣装のジェラバ（フード付きローブ）です。



後ろがスペイン・タリフ



タンジェ到着 米・独人が多い



ツアーグループ



コブラ



蛇を首に巻き付け、「金をくれ！」



街角で楽器演奏



香料等の販売店



陶器製 2 連太鼓

ツアーグループは、ドイツ人 10 人、スイス人 1 人と日本人 2 人でした。モロッコはシェンゲン協定に参加していませんが、この頃はまだ出入国手続きも簡単でした。港の回りはスペインとあまり変わりなくも感じましたが、旧市街地に入ると全く違った雰囲気でした。観光客のグループにはカメラマンや物売りが付いて回り、昼食レストランに撮った写真を売りに来ました。街頭でコブラを見せている近くでは、いきなり別の蛇を首に巻き付けてきて金を要求するものや、街角で楽器演奏しているグループもありました。香料・ハーブの実演販売店もコースになっていました。郊外でラクダに乗せるものもあり、当時から「インバウンド経済」を狙ったものが多数ありました。迷路のような街路でドイツ人の子供が行方不明になり大慌てしましたが、程なく見つかりました。昼食は世界最小の Pasta、クスクス料理でした。壁が絨毯のような布で装飾され、楽団が生演奏しているレストランでした。食事とミントティーはツアー代に含まれていましたがビールは追加精算、モロッコ通貨ではなくスペインのペセタを使えました。ただ、周辺レストランの店頭看板に比べて倍近く高かったように記憶しています。付きまとう物売りから陶器製の 2 連太鼓を値切って 500 ペセタで買いました。ネットに最近のマラガ発着の同種ツアーの評があり、出入国手続きの長さやマラガ・タリファ間の移動時間の不満が記載されていました。



昼食レストラン クスクス料理



一角で楽団が生演奏



ビールは追加料金

タンジエは、紀元前 4 世紀頃カルタゴによって始まりローマ帝国時代もあり、その後イスラム教勢力の支配下になり、キリスト教徒によるレコンキスタで 1471 年にポルトガル領となり、1661 年にはイギリス領、1684 年にはアラウィー朝に引き渡され、フランス・ドイツ間の第 1 次・第 2 次モロッコ事件を経て 1911 年にモロッコはフランス保護国化、タンジエは国際管理地域となったそうです。1940 年にスペインがタンジエに侵攻しスペイン保護領モロッコに併合、第 2 次大戦後 1945 年タンジエは国際管理地域に戻り、1956 年モロッコに復帰したとのこと。ヨーロッパや地中海周辺等の各地で同様に複雑な歴史を持つところがたくさんあり、このような歴史を経ている、また人口わずか 2~30 万人で

あってもその地域や国としてのアイデンティティーを持ち続けているところもあります。今なおアフリカ大陸側にもタンジエの東 50km 程のセウタと同 270km 程のメリリヤというスペイン領が残っています。モロッコには西サハラ問題もあります。またスペインアルヘシラスの湾（幅 8km 程）の対岸はジブラルタルというイギリス領で、小さな半島ですが港（ミサイル駆逐艦も停泊）だけでなく軍民共用の国際空港（鉄道の踏切のように道路と十字交差する 1,800mの滑走路）もあります。間の湾名もグーグルマップで「ジブラルタル湾（アルヘシラス湾）」と併記されています。関係者にひとりでも暴君がいれば、紛争の種は幾らでも作られてしまいそうです。ジブラルタルには、イギリスのチャールズ国王が皇太子時代にダイアナ妃との新婚旅行で立ち寄ったとのこと。ジョン・レノンとオノ・ヨーコが結婚式を挙げたのも、ジブラルタルだったそうです。どちらもあえてそこを選んだものと思われませんが、イギリス・スペイン両者に、平和かつ温和な日本ではなかなか理解や想像もできないそれぞれの感情もありそうです。時折それを感じさせる報道もあります。南樺太が残っていて陸地の国境が有ったら、日本にも現在とは少し違った国民感情も醸成されたのかも知れません。



多数の発電風車

今から 29 年も前ですがタリファ近くの山の稜線上には多数の発電風車がありました。現在のグーグルマップのストリートビューでも幾つもの風車群が確認できます。このツアーは、帰路もアルヘシラスのホテルまでバスで送り届けてくれました。アルヘシラス 2 連泊で、荷物はホテルに置いての手軽な 1 日観光でしたが、やはりもう少し現地での時間があれば良かったと思いました。タンジエにカスバ博物館もあります。100km 程南東には青い街として知られるシャウエンもあります。フェスやカサブランカ、さらにサハラ砂漠等も加えて、モロッコにまたいつか行けたらいいなどの希望を残せたツアーでした。

(写真撮影 1997.11.11 2 連太鼓のみ 2026.04.16)

< Google マップ参照 >

URL は、下の「PDF はこちら」に入り、アンダーラインをクリックしてください。

タリファ <https://www.google.co.jp/maps/@36.0142148,-5.6084063,13.76z>

タンジエ <https://www.google.co.jp/maps/@35.7774334,-5.8251567,12.22z>

アルヘシラス <https://www.google.co.jp/maps/@36.144535,-5.4667357,12.76z>

ジブラルタル <https://www.google.co.jp/maps/@36.1363348,-5.3466716,13.26z>

セウタ <https://www.google.co.jp/maps/@35.8975934,-5.3368533,13.5z>

メリリヤ <https://www.google.co.jp/maps/@35.2974004,-2.9362259,13.25z>

発電風車群 <https://www.google.co.jp/maps/@36.0566931,-5.5738983,14.04z>